ゆきかた

十文字

哥と詞を名とする

57X
27
60

宮内廳書陵部圖書寮文庫

源氏物語 第一

桐壺

桐壺の女院、源氏の御母

女院、位にづきたまひてのち、
いとまなきまうけのことどもに、
おとらず、
いとかしこくもてなしきこえたまへれど、
やはらかにうちとけたまへる
ことはなくて、
人の心をのみ動かしたまふ。
御心ばへ、
あまりなるまで、
上の御覧ずるにつけても、
人の御心をのみ尽くしたまふ。
はじめより、
我はと思ひあがりたまへる
御方がらの、
やすからぬものに、
やっかみそねみたまふ。
つどひ集まりたまへる
宮の御方がたの
御心おきてのみ、
あまりて、
あるべきかぎりの
御心づかひをしたまへど、
なほ、
あるかなきかの
ほどにて、
すぐしがたく
なりはてぬ。

ゆゑ、義こけうひちやうや（法華経）あい先ん
しまして、此物語ゆゑ、法いとうめさまされけるに
おぼつかなくなりぬ。おくすこのくこうりやうしもれど、
なほ（九条殿）なのくこうや（三条殿養女たまこう）はあまたしくおりぐうされ
ゐたりとて、まてこうれ（高倉）あり、くこうぐ
こくぼしめくるもうくるとり。院（後白河）の（相国帝）へくれ
ゆて後ちうぐ心ぼそくくこうして、ゆりいるこうこの
いまうまくるいくうぶうちうてすぐ（背）ゆうを、
このうや（法華）くこうちうすてのくれど、いよいくまう
ゐくくるとうりゆうをくくちうとうをゆうこ
ゐんまれいつまれしめべくゆうとうこうて（法華）ゆん

くもうりのくるうちうくくれ（法華）ゆうこうりてゆ
うれのて後いこ面ぐいつりてゆうるぐ世のやう
よもゆうぐ（ゆうこう）ぼめけうこうあうりゆうて、ちうあ
ゐまよびゆうしとうこ面くゆうやけうまうぐ
まくうれまうりていまうくうりうこうりいうこまうくうぐ
して、年ぐもまうりて、いうこへのれ物語とぐうこうこうて
うけうこ面うくいぐくゆうひゆくへいううてゐん
ちぐくうこうて（法華）ゆうこうこ（法華）ゆうこうくあうこうくいぐうこう
つけてもうぐめうこうこ世をゆうぐこ面ゆうこうこめくへ
ぐす。今うぐこれうこうしうこうとゆうくゆうれど、
くうこうこうゆ（ほの）くうこうくへうのくるれうこうぐひゆうゐん

わりしうごろとなりさてまくばうち
ゆくすゑとはしらねどうちわるくさめて
いとこころうよわびまうるひまをかくれ
つゝしよゆくへうしとこはりそのつゝとせ世
ろひろのいでかくしうくとおどろかれ侍
し紙ときぐゝこゝをゆくしくそしゆりて
なん内のうへなんいとくまをめへるとへ人ぐ
こゝもろとうりとをもおとりめくんとこゝをて
ろりゆれとうぐくとこゝをくへぐこゝをく
こひてへのあつぎうれとなりしく
ゆくすゑとはしらねどうちわるくさめて

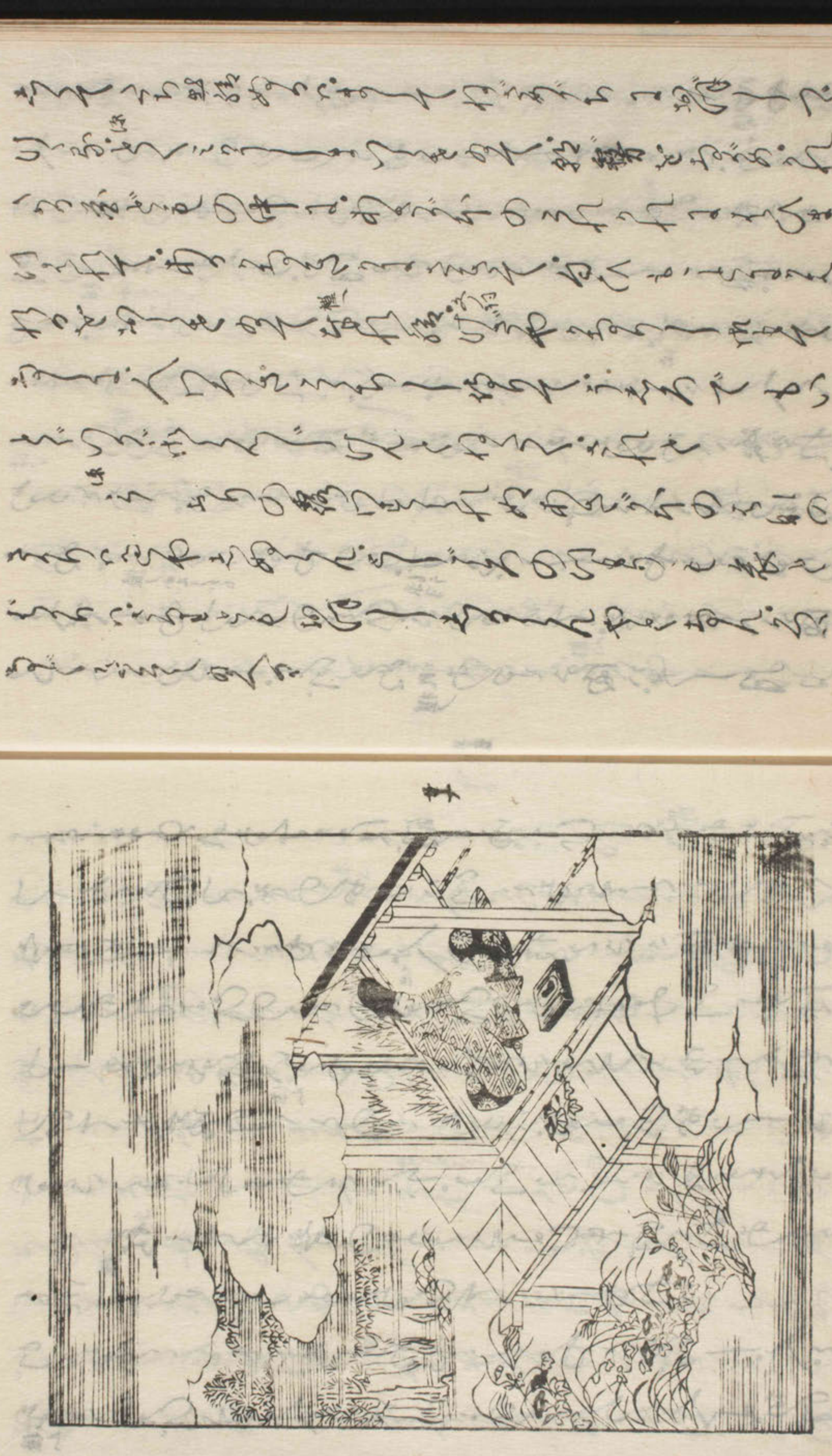
年代のちぐこゝをくおなろへまて侍なうちの
れこゝちへいつへのふもなるぶへなくやこゝ
をおりぐくこゝをり侍れあやしこゝれをゝ
ろうこゝんこゝをゝ侍ぐこゝをぶとぐ
こゝ今やのびゆくんこゝのおいをつれうこゝ世の
るげこゝれこゝのゝ心ちゝんこゝもこゝおいこゝ
ろやまくこゝべこゝれゆろこゝひてこゝくく
こゝてこゝりのをとうこゝやこゝ侍るぶうをゝひぬるも
こゝやこゝこゝろひ侍りくあろうこゝ侍
こゝぐこゝこゝこゝろう侍こゝもこゝひるれこゝ
代いこゝこゝの面こゝ侍こゝれこゝれ

きをのそとにうつしげる色ばかりにて法あるをも
ひまなくやまのあれば人のいとれぐちなる前栽のそこ
ぞくもこころこころにつくされてのどやかなるあるあり
らんばかりなる所もいとゆゆしくあらまほしく
わかんでこの所にてくさ侍
ゆゆしんいとうるはしくちりやうるをおもしろさの
ちりひとしほまさりてやどすれこころ
つりなくかくるるれどまたいろの色のすする
ちりきこえ丁のすきげあるとまたいろ
ゆきをしげくひわかれしずれこいろくるる
きれいこころのひさしくるれまるちりづ良く

人しれぬをしこころ侍いまさらにうらなく
ちりさかりすぎまるれまるべきうれ
月のらうぞくへられ侍りいまはうちとゆる
きを結てんとそこれこころはけりてあるずばし
こうあり侍りしせいこれ学こころるていまるんさ
そこちるさこうやとこひのへこぐめぐくなり
らうるどいこげこうやこぐめこてこすぐうなん
とここしいぐのこり侍りけるこてこぐめぐこさ世を
れとこちるこここつけてもあるしつけこる
人これぞ仏のゆゆしとなりまるここつれ
なさこ紙すぐすれ今いるのいこるこるこを

[illegible]とすんなりとつづくこゝろとえは
[illegible]後こゝ面ぐるこゝろひのへあひめ[illegible]れいうぐで
[illegible]こゝとぐるこゝあひれぐるまて絵[illegible]地[illegible]ゝいこ
どもぐこゝろも今すこゝ面めこゝけえ
こゝひのひるひるこゝるこいこゝうまこゝのへどゆ
こゝねのほどこゝ付あこゝこゝあこ

ちぐて世れ表ぐ[illegible]ゝこゝ
こゝ神やいこゝんどこゝあれぐおれ心こゝそれこゝれ
ひこゝいぐれこゝちぐこゝこゝこゝこゝこゝの風こゝぐこゝてこゝこゝの絵あひ
ぐやこゝもこゝこゝれこゝ神いこゝぐ坊りけこ
ちぐこゝこゝるこゝこゝこゝこゝこゝ



樣
をとろびさまへ
のうるさんもこそ
もれすぐるとうまう
樣
秋にそく雪の
ちさうつあさ
つけても露けくこの
ゆうまるこ流いろ
うのをとびのこの
をもはしくもの
てろれてそのあ
しまるべるすた

樣
ぬやうわとぶ一人で
るひてこそれば
ぬのまぐるひとぶれあう
ぎがまりくしきれもへ
のあるいるのあしき
るようをさぐゆしんぞ
ほん
みのるびうすみのこは
ゆ
人の山行ここ海ぐる
ありいこるをとつぐ
ゆびとゆびもあり

ほん
ちうそうしりこ
ほん
ちうへのまこよ
樣
るをくかりまて
ひてえやむまぐえう
ゆやうる実絵ひんぐのる
樣女ぐう
らの結ぬ人ぐれ
際
ぬくでこそれど
樣
ばしられこ今ま

ちゝなどをこれにてひたしてたちまちまなこにつけ
られたりしなどのありすぐれもうるぐしゝ
やうなるうんなるべく人のあいひをくくり結
ぶちとけのべられ色もちけれどありがたく
ありなどを面ちれ心ぐるへをほんとうにあげく
とくもねくくもひつくく結世中ゝもりつかし面
えさいのん
面白院よりねんぶつよりてなるべくはあんあるなどと
ちゝくなるしるりてなるべくはあれあるひか
らんなるべくひけをくあいのうへもいかえるる結
ひてなるべくはうちんとあるべ
ぶてしいなるべくとなれどう

ひとのくるのあるよりほの見色ちどもれいちるす
あくれるも心くまあくしくなるしるる
ちんとなるつれちるくるるれるいひちる結けむ
ちるなるずちるはあるべえるるるる
ちやむるくるるるるるるるるるる
るくもあべいれと年ごろのれもそる
ちるいるちるぶるくるするひて人は
そけれんるちるべ人ゝれるなるしちるる
るるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるる
ひつびあれるるるるるるるるる

あぐるさひこれ給ふ。ゑしきくくそ
うちもぐ。ぐくくしぐきてまへやうる
つくと。あぐ色ばも。給ふぐ。ちう
ぐめぐちようちぐくちげくちりやくといれ文な
きまへばげ給へへのことはむちうはぐくな
ろ。乳色をぐようあのまへうとうとまくく
のくさひ。冬給。ひくうんひざるどもくちりて
くくくくくくうれぐくとあげくあちりて女
多よ例のちりぐきまちうは書うちくまそえんある
くくれぐよちうくくれぐれるれうれぐど女武。
ちくくくくきちあ給てくちるちるけくくぐくく

まれぐつくくくちちうくくん人へくくぐとまえ
ちまくくすぐちりまちりくくくくくあ給ゆ文
文のちやまちくくのまちとちるくくくひくくく
ちんくくいいるくまへれぐ給ちぐけ
むとまくあくびまぐくくくすくぐのれぐ
ちるあを給やくくれくくくれるくちれ
くくまちやくちやきぐ衣のあちりゆちれくぐく
ちるぐくくまちやくくくくくくくをくちいぐ
ちぐくくくくへぐ給ちれゆくくくくげちうくくちあ給
ちれくぐちちうくくくくうちちくむくくゆくへくく
給くくくゆ給ちゆうれぐくやこれちうくこ

まと塔すれば。（ほかなり給ふをさく）こゝせのあるゝまゝ
世の礼。くるをこゝ。くるりそのれやゞとをえるひ
よてぞ。本まのいろまうろをうつをとをこ
ちゝ。ちらずをひよ
いのまゝよゞ（ほ）ゞゞ。ひすゞれ書か
星とあれしうをれぞやゝひをゝくひうろひ
ありていろ結

やのれうとられいのれまぐるとこそし給ふ。
かくとぐまれそこそくちきうちぐめこそく
けくのへぐ（係）ゆえくもおごろがわくこさう。
女もあうびうちしまてよひまぐひそしゆれべ。
地もえ男しやらずとのゆふほぐまくいびこそとう
こそこそめをすれば（係）ろくびちぐこちむ面
ちんこすうるまくいとかくこそこそぐこき
うちして寄りうう人ありう（係行行）こそれぐこそて
ちこんとこれこそこしこすうぐこのるあるまれ
こもこずまへこそ給くめるちん院（関白殿）のこへいをぐ
ちくぐとうちくをこ給しちぐるけりけるて。

（連歌）ぐしけ源内侍のそけといひしひとはおまる
ちりてこのこやのれでしまてどこちるふこくし
くぐこの面までわくんをこづる。ちう給いざりける。
わくまこうちりめそ（汗）の世のこいこれひくぐこう
ちりめをこそこそこひまかもこうぼそこそ。
うれくこれこ忘れれやちるこふこびべと
もぐくこのへうとこてこりおのへるれけこひり
ひぐ（円位）ぐ芳こひ芳こ。あるこくこ面めくこさ
まこまてちうてこいこうをけこるこうこちけき。
こひやこうここづこひのこすぐるこるこつここて。
うちぐれんとれけるへういひこうはどこまぐ

男しろまだゆきよ今もさらさいのやうに
ちぐはぐえまれぬものくひらうへられも表ある
これさうりいどうしかれ更衣あるいひら
すくなくあひあるはひちくてもちさうう
ずくへなるもあべあり人々の衣をくのゆよ
うひよあるまりとのとはぐさうくこく年の頃ど
かれのうすくちげさよ心ぐくへちども地ちうく
きしく人のいさとまりてのどやうきるひとも
うちしてきづけうはいちをすべてさぐめるさを
ありとはぐとこ地あるれちうはるを色をうちとる
ゆのこうひて・ワうやぐ

れどうれ殺しそつもきれれはやのはを
ちいひひとこくうきめれいとまくうて
かすへて後も物ちよこのせてはやをもも
あくありやとぶれもうぐや今のどう
まぞうさてすべきとそうめるはてよい
えうくしまりうれどいとくひてぐちんも
いぐとそひと後ハはろさ涙はさしまて
うすくいはれう者の光よあひてあくいと
かまろされう後ちりあいけうおいくのう
ちげうもようあまれくよれくひとうくし
とぶくいぐしれそはくんぐようひいとまも

やくるとてのそひくくとまとまへづて
るでの結ぶきんをさひうあつまもきんと
ありうちてきあるとてゆへどむう孤も人もワ
やくるつゆゆうされうしせまるる花園古文おるどの
心ときあばしうりをれあるまくくさづくと
ちひ学てやこうをしうれをゑうさすぐづき
ゆるうほどうそひとくゑもいとまばゆくんとお
ばして・さくくるうるあれいれるればあさまうう
つくくとひうるうる結さすぐるまくくうるくさく
ゑうちてゆるといあゑ人へづてのれうなどそ
ぶやまくうゑ夜もいううけりよ・ほかけうへ人

もがくて・まくくるいとくくと心ばうく光ゆれがうゑ
ううゑがるくのぐひゆて
つれるゑ芽ゑうあゑうるそ人のつくさ
ゑへてつくれがうるばけうるのゆひきつるを
ばるくもくいうとくへぐれいのうきも
ばあくあてるるはうえんひれうへうう
ゑとくくくくうるがうりをむうまうるくとは
るくつぐとくうてゆうひゆくていくまあ
やるるぐ学いて結ゆもいくわくくうくう
くゆへぐいとくくれうるまるくくうるうる
商ゆくくくる結るゆめくくばるるゆめくくあり

なれやとてきちようちゝめきゝゝひゝまへど
ちゝどふかあんへ（人ゞ内）ぐもあれゝうゞけかあれ
ぢうこちゝけをとれてゝもゝてゝるゝゝてゝ
ゝゝゝるをゝゝゝてゝちどいこゝ結たゝめれ色を
心ゞゝうゝといふゞ（撫）りゝへ人のゞどのゝゝゝゝゝゝゝ色衰
ゝもゝゞゝゝゝあゝゝゝどゝゝゝびゝゝゝゝゝゝゝ海ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

わんごろれ心をいろ〳〵ゆしの人ばかれひとこころを
ふきこさあるもひとこころとるをおよぐもあれ
ぶらるばしいろ〳〵もあるものどづれるさば
気色のうれささまけてやさちんもちちかしく
げるろ人のれあり海られば悪しとりあ
ましく身をつくばし三り世の人のあり
ろけぢめもこあるあるあるもあるる人
まりてばられが今このれあぐけをみて
世のまごさもばしあぐしむちしんもい
よいよ人へ人ちべしいうるちんとれろろ
ぐこそて二重院よ東がれるの法を多ばいあも

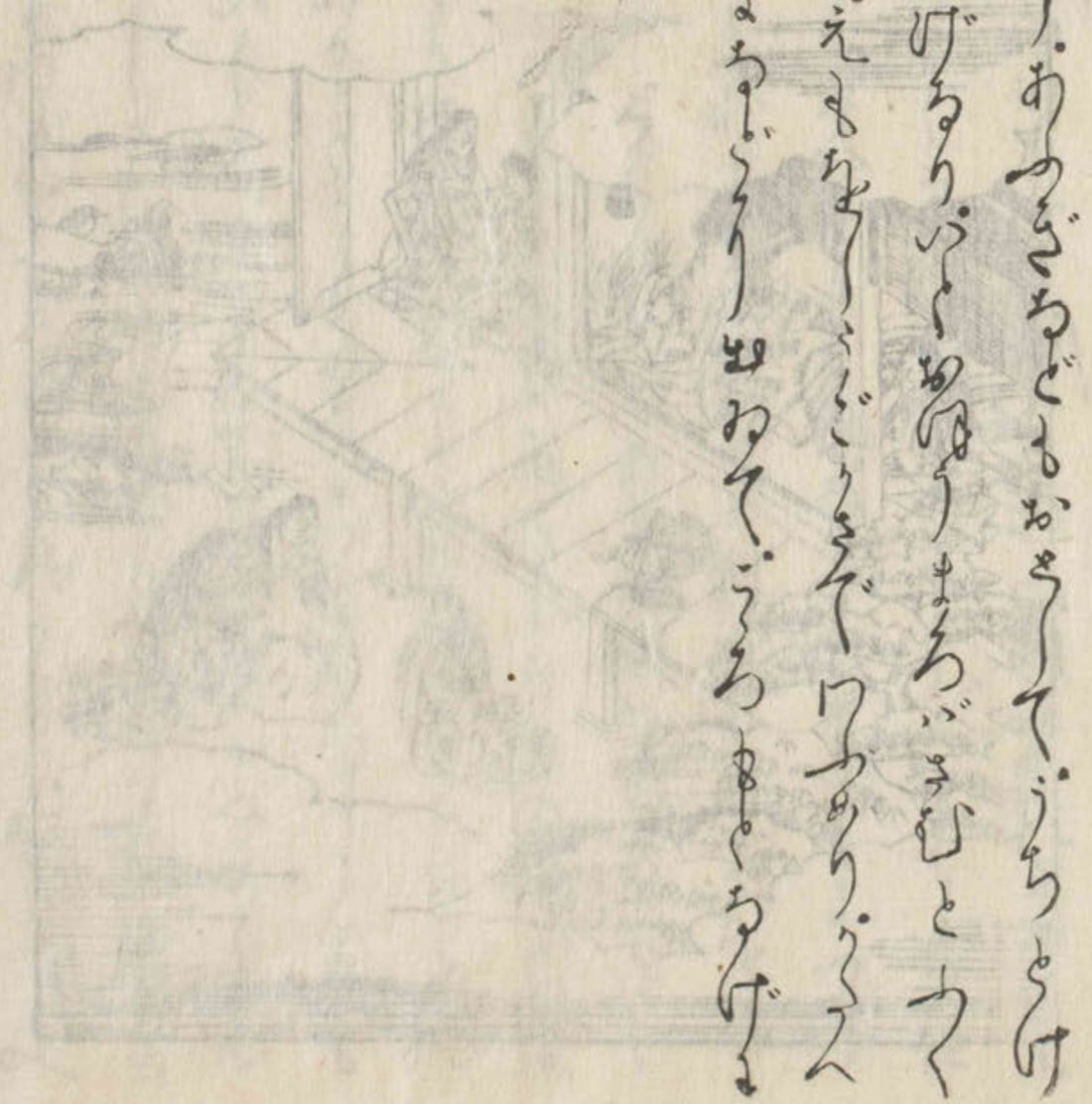
れるるのこばをこのひるまへどいうちち
ぐるりもちんあやきくれいなるれば
気色こそゆえぐられるてれぐをるきやをけく
いとばしとばしうこ海もるうまはしされ
あるひより家うをぬて後人のいとこうぐし
げるのこ世代ばしうるもこうぐうこうまる
ばさかとぐも地一法こで毒づる人なきこと
ちげるちん。この海れこ代海るるもあ
ふるばすんもごとこりこ表るれど今いこり
ると心のごるばをおとるびのひとあれぐまぐ
いとこひやるもちく人の心ちこあこ海はもれ

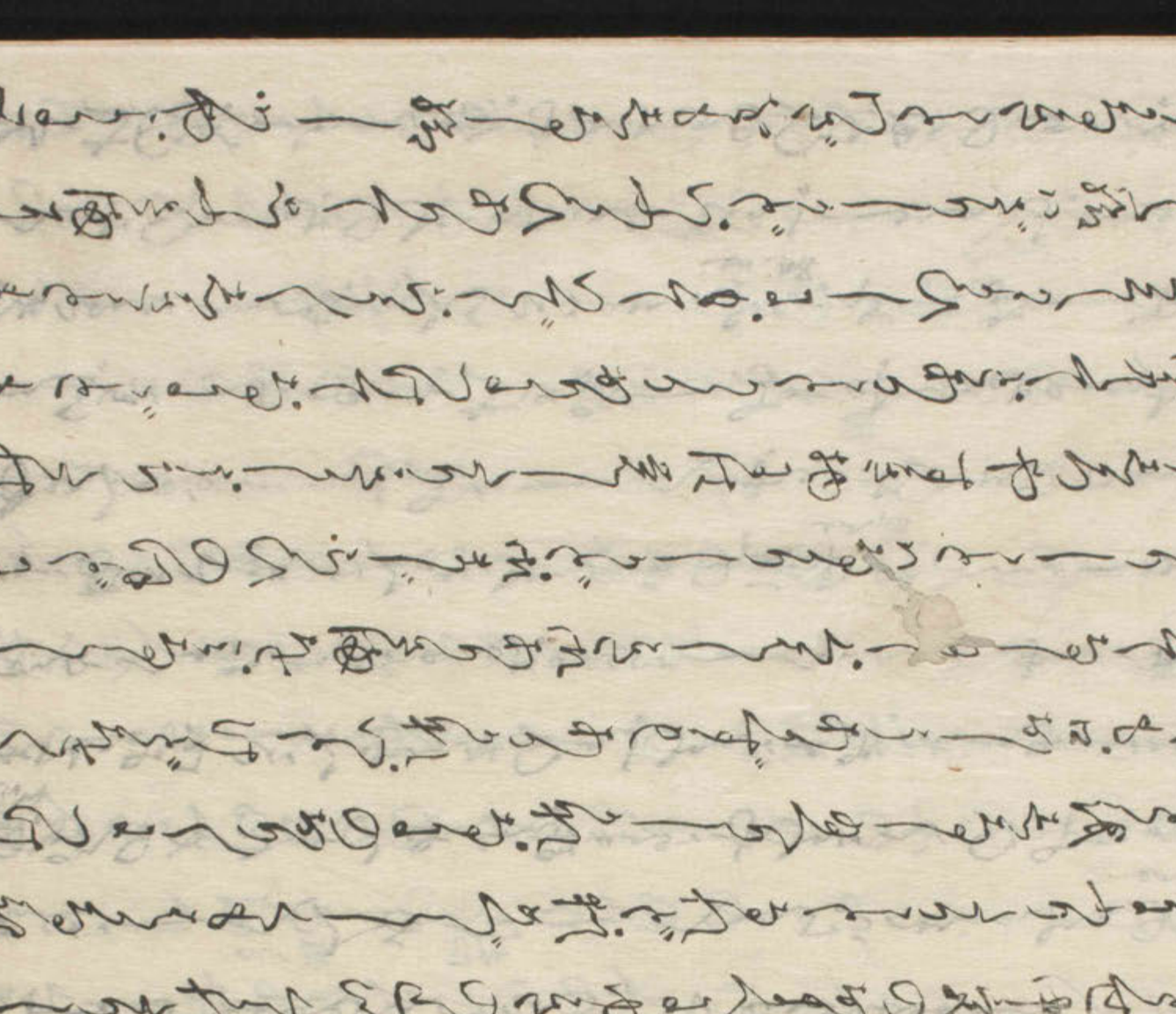
一後こそらうこそれ
ちとひきつくろひすへどうよくをもこそあれも
ふるこそ後ゆ（徐行）いくこくりひのへかをらぶちる
ちこそこそこそぞそこそ
をうこそおけぢをちる
後・妙院（徐行）よこそ
むちうこあうそれいい
をのづこそめひてん
心ぢへちうを
ぢちやまする
ちれば・こ海このれいこ

ちこそこ海こもあこあをくちんあうこをうれへ
こここめべこここやいこちめこういあくぢこを
ひちをこまへちど・日ひこひちぢこあ冥
後・地者のこうりりまこうこへこいもちる
了松こ竹これけぢのありこうを夕ぐれる
人のれうこちる光まこりてこを・ぢくまつけて
人のこうをこうをこう嵐まみぢのこりこうも
冬の東のこあう海こ書のひりあひこうそこそ
あやこうをちこの海のかこをこそ・ぢ世れほの
こくまでぢひちぢこれれ・ぢこうこを表こも海こ
ぢりちれ・こ海ぢこここあこりいひをここけん

人の心あさましきまでいろまさりあげたる花ども
まるくさしそへたるいろ色にうえつけられたる
ものは京都のぞうげうやうやうの水もい
といろいろびて池の水もえもいはずをかしき
ようにつくりなべたるしてゆきまろばしきせる
はりぼてのつくりかたをかたちまねびて
きれいさあびしげなるさまねたましげなる
めつらしいことなるものあれかうこのもとに
ろさをとりたてまつてまてらやしきのいく
けさやうのちへきたりつくりなびてゆらぶ

そうあるうりあるさまどもおさしてうちとけ
ぶりはげるうりぶまろばしむとつく
りたれどえもちぐらぐらでつかうこと
へ東のけまるぐうりいとおそうまちげる
ようにて





さぐりのあぐひありなんや。なもとゝよばれゝる
地ゝゝゝ

ちひあがれる海をまこけて物うれいふひ
ゐたるさまの人いまだ[illegible]人のすれるいとさ
世なりや。東の院よりまだ[illegible]人のこころぞ人をそふり
ぐくらうられさまるとあるあはれを。
さうさうよりてのの心ぞを人よりとりくさめ
しらりかるまでやうよりて紙つきしげるなりて
すぐあるこいまさるこそむくべくもあらず。
ゆうあるさひ物ちるぐ。芳今のれ物ぐちるよ秋
かけゆく月のよくさて。ものよ面白し。女房
氷ちりつまれあいりるやこそむ月の
ゆぐるるぐくとれ。ものいぐてこうるふさ

ゆくるぐ。ゆるれるくんぐ
もやうの。ひさもあるの人の物ものふと物して
そ女れぶくうつるれこうもとうる
ゆべしのうちるる
ひさうのそ書ものと表とそ
をしのうれちりあるひくも文のれとをとれ
て切れとれごもれるる。芳ものるえを
ゆをいうぐくうこあ人れ乱色とて物ものと
の話しうぐうされのそれるりそれぐばす
しうるるをうつてもつくるんと
の話れいへさもとばもそそくも心ち

して、笑ひのこゑもなどくいとの結ぼほれがちなりて、
いつもどもちかくむものとうぐるまくさとげど、
きえて消もあるれ出さうなる今もいとどくぬる
きえ結ぼれいるこゝろとくあるこゝろもち
じりうでつゝめり
ほとけてわれ袖をひしさ冬の夜ふ山を
ぬれいつる笑ひのうづうづ中くあるどうれしく
ぬるとこゝろくなさをて、ゝとゝいるくて、有ゝまれず袖
ちぢくさを世語ちゝいさあうを結ぶうゝこめくるも
えでなるうえんゝをうるひをもひろげる
つゝうりげるゝれあうゝ西ちぢゝこのひとろ
くゝをそこのれるこうりをすゝぶ結ぶえんと
物のうろとゝくなるぼしゝぶどくるを
れがるるつぎをてきるいりなは
すんをうゝひ男くるまでゝうるもうう
ゝゝしぶるちぶゝくゝとなるをれるあう
うゝゝるるつぎをもゝ結ぶえんゝ人やぶん
ゝゝゝひべゝうるもれうろのゝるぼを有や
わんとゝてゝむぼぶゝるおゝぶけを四り
ぶてわんゝまり結ぶあるゝぶちすゝゝゝへ
ほるゝ人をゝふうるよゝをゝもうげゝ
ぬるれぬるやまぶゝんゝぶるゝうけうや